

小中学生の読書行動に家庭環境が及ぼす影響

秋田 喜代美
(東京大学教育学部)

本研究は、子の読書への参加と熟達化に家庭が果たす役割という観点から、読書に関する家庭環境を、①家に本を置くという物理的環境準備者としての役割、②親自身が読書を行い、読書熟達者のモデルを子に示す役割、③子に本を読むよう勧めたり、本を買い与えたり、本屋や図書館へ連れていくなど直接的な動機付けを行う役割、④親が子どもに本を読んでやることによって直接読み方を教授したり、子どもが本を理解できるよう援助したりする役割の4種類に整理し、各役割が子の読書に与える影響を検討したものである。小3, 小5, 中2, 計506名を対象に質問紙調査を行った結果、次の4点が明らかとなった。第1に、親が読書好きであることが、子に対する様々な行動の量に影響を与えること、第2に親が読み聞かせをしたり図書館や本屋に連れて行くなど、読書に関して子どもと直接関わるの方が蔵書量や親自身の行動よりも子の感情に与える影響が大きいこと、第3に親の役割内容には子の感情と関連のある役割と読書量と関連のある役割があること、第4に役割には子の学年と共に影響が弱くなる役割と学年によらず影響を与える役割があることである。

【キーワード】読書, 家庭環境の役割, 認知的徒弟制, 親子の相互作用

問 題

読書は、現在の日本では、幼児期から老年期に至るまで生涯を通じて多くの人が行っている行動である。だが、生存に不可欠な行動ではない。行おうと望ましいと特定の社会の中で考えられ、歴史的に継承されてきている文化的行動である(Engelsing, 1973; Heath, 1982; 滑川, 1979;)¹⁾。

では、子どもが読書行動を習得し自立的に行っていくのに、家庭(親)はどのような影響を与えているのだろうか。

日常生活における子どもの行動には、食事や入浴のように生理的必然性のある行動や勉強のように社会的要請の強い行動、あるいは宿題のように行わないとなんらかの制裁が与えられる行動と、行動選択の自由があり、行わなくても制裁がない行動がある。いずれの行動でも行動様式(スタイル)に親は影響を与えていると考えられる。だが特に、行動選択の自由が大きい行動では、子の行動量に家庭(親)が与える影響も大きいのではないかと

注1) 人間の行動のあり方はその人の生きている文化、社会の影響を受けている。こうした意味では人間の行う行動はどの行動も皆文化的行動だということができる。しかし、言語や食事など社会的歴史的にみてかなり普遍に存在し人間の生存にとって行動の必然性の高い行動と、生理的な必然性は伴わないが特定の時代や社会の中で生まれ存続し、その社会成員が価値をおく行動があると考えられる。本論では後者のことを特に文化的行動と呼んでいる。

と考えられる。例えば、放課後自由に遊ばせるのか、どんなお稽古をさせるのか、いかに過ごさせるかは、各家庭の価値づけが影響を及ぼすと考えられる。読書もまた、選択の自由度が大きい行動の一つである。初めて本と出会うのも多くは家庭である。成長しても家庭が読書の場になる場合が多い。これらのことを考えれば、家庭の影響は比較的大きいのではないかと推察される。子の読書に親が影響を与えることは、体験的なエピソードとしても示されている(例えば福沢, 1991; 亀村, 1984)。

本研究のねらいは、近年示されている次の3見解を理論的枠組みとして参考にし、読書に関して家庭環境としての親が子に与える影響の検討を実証的に行うことにある。

第1の見解は、日常生活の中の特定の領域や活動に注目し、初心者としての子どもが熟達化していく過程として、発達を捉える考え方である(無藤, 1992; Price & Hatano, 1991; Rogoff, 1990; Valsiner, 1988)。Rogoff (1990)は、「認知的徒弟制」という語を用いて、初心者としての子どもが、社会において文化的に構造化された実践活動(practices)に参加し、熟達者としての大人を観察したり、熟達者に導かれて一緒にその実践を行っていくことにより熟達化していく過程を説明している。一般的な認知能力や言語能力を問題にするのではなく、生活における活動自体を対象とし、その活動の熟達化として発達を捉える考え方である。

第2の見解は、生活する文化により、子どもに対する

期待や与える道具は異なっており、特に家庭（親）は、子どもが熟達化する領域や熟達様式の選択を行い、子の熟達化を方向付ける機能を果たしているとする考え方である（東・柏木・ヘス, 1982 ; Hatano, 1982 ; Rogoff, 1990）。Price & Hatano (1991) は、家庭（親）は、各家庭が重要だと価値を与える特定の領域を選択し、その領域において子どもが熟達化しよう動機づけたり育てたりする環境であり、家庭がどの領域をどの程度重要と考えるか、どのような役割を果たすかが、子どもの学校における認知課題達成の個人差に影響を与えるとしている。そして、環境としての家庭の役割を5種類に分けている。①子どもが生活する文化の目的や価値を、子どもが他者と共有できるようにする一次的な座談の場 (forum) の役割、②ある課題で子が熟達化するよう、親は親方、子どもは徒弟として、子に仕事を与え評価や援助する徒弟制を提供する役割、③各家庭は子どもが家で学ばねばならないことについてカリキュラムをもっており、それに沿って子どもに教授する役割、④子どもが課題を円滑に行うのに障害となっている部分、不得意部分を指摘し援助する役割、⑤子どもが課題を行うのに障害となっている環境を取り除き、上手くできない部分に関し方略を教える役割の5種類である。そして、領域により家庭の影響が強い領域と弱い領域があるだろうとしている。

田島・臼井 (1979) は、認知的社会化研究を展望する中で、家庭環境は、相互交渉を中心とした社会対人的側面と物理的側面に分けることができ、従来の研究は前者の側面に集中してきた傾向があり、また家庭環境は HOME (Home Observation for Measurement of the Environment) や SES (Socio economic status) などの一般変数を指標として研究されてきたとしている。だが、特定の領域での熟達化として発達を考えるならば、一般的な環境変数のみではなく、対象とする領域固有の環境がどのように準備されているのか、どのような社会的相互交渉がなされ、その領域固有の物理的環境が、どのような形でどの程度子どもに提供されているのかを検討することが必要だと考えられる。

第3の見解は、子どもの熟達化に伴い、親との相互交渉の内容は変化していくとする知見である。外山・無藤 (1990) は、食事場面の母子相互交渉の分析から、二宮・梶田・吉田・杉村 (1992) は入浴に関する母親への質問紙により、日常的活動における、子の年齢に伴う相互交渉の変化を示している。また Kindermann & Skinner (1988) は、歩行、食事、着衣に関して、9カ月から21カ月までの母子相互交渉を観察し、各々の行動の習得が生物学的にまた社会文化的に必要とされる時に、交渉の量が最も増加すること、自立と共に母親の随伴的反応は減少することを示している。活動の習得にとって重要な時期と習得以降では、社会対人的環境としての交渉の様式が変化

し、環境の与える影響が変わることが明らかになっている。

以上の3知見を参考にし、本研究では、第1に文化的な活動の1つである読書を対象にし、第2に読書に固有の家庭環境を、子の読書行動への参加と熟達化に果たす機能という観点から整理し、第3に子の年齢による影響の違いを検討する。このため、具体的には、研究分析枠組み、研究対象について、以下の2点を考慮した。

第1点は、家庭の果たす役割を、Price & Hatano (1991) の分類に直接対応するものではないが、子どもが読書行動に対する機能の点から5種類の内容に分けて考えることである。①家に本があり、子どもが本文化に接触することを物理的に可能にする物理的環境設定、準備者としての役割、②親自身がよく読書を行い、読書熟達者のモデルとしての親が初心者としての子どもに行動のあり方を見せる役割、③子どもに本を読むことを勧めたり、子のために本を買い与えたり、本屋や図書館へ連れていくことによって、子どもの読書活動参加への直接的な動機付けを行う役割、④親が子どもに本を読んでやることにより読み方を教授したり、子どもが本を理解できるよう読書の熟達化を援助する役割、⑤子どもの読書をほめたり、よりよい読み方の助言を行うような行動評価者の役割である。

この観点から、今までに行われてきた読書環境に関する研究をみると、家庭の社会経済的地位という全般的な家庭環境が子どもの読書量や読書内容に影響を与えることは米国で行われてきている (阪本・岡田・高木 (1979) のレビューによる)。また深谷 (1978) は500名の幼児の親を対象とする調査から、本に対する母親の好意度と子どもの好意度間には0.24の相関があったが、父親の好意度との相関は非常に小さかったことから、母親の読書好意度が子に影響を与えることを示している。親の好意度と子の好意度の関連が言及されることは多い。だが、親が本好きであることが、子の読書に親が関わる際に具体的にどのような形の行動となって影響を与えるのかまでは、必ずしも十分に検討されていない。

親の行動という点では、上記5内容のうち、②の親がよく読む点については、深谷 (1983) が小4から小6を対象に、両親の読書量と子の読書量間に関連があることを示している。③の子を直接動機づける点に関しては、小学生では物語や童話をよく読む子の方が母親が本を買い与えることが多いこと (福武書店教育研究所, 1985)、中学生では本好きの子ほど本が多く、幼い頃から本を買ってもらった割合が高いこと (福武書店教育研究所, 1991) が報告されている。④の親が本を読んであげる点に関しては、本好きの子ほど、幼い頃から本を読んでもらった割合が高いこと (福武書店教育研究所, 1991) が示されている。また、小、中、高校生を通じた調査結果として毎日

新聞世論調査(1991)は、マンガでは両親がマンガをよく読むことが子のマンガを読む量に強い影響を与えるが、本では両親自身がよく読むことよりも、本の内容について子どもと話すことが子の読書量に影響を与えること、すなわち親が子どもの読んでいる本に関心を示し、話題にすることが必要だとしている。⑤の行動評価者としての役割に関しては、秋田・無藤(1991)が小中学生の読書の意義に対する捉え方を検討し、小3では大人に褒められることが空想したり感動できることと並んで評定が高いのに対し、学年と共に空想や感動は高くなるが賞賛は低下すること、すなわち、子が親を自分の読書行動評価者として認識することは年齢と共に減少することを示している。

以上のように、5つの役割のうちの1つに焦点をあてた研究はある。だが、役割を整理し、それぞれの影響を比較し検討することは、まだ行われていない。本研究では、読書環境のうち①から④に関して、具体的な指標として、①は自宅蔵書量、②は父・母の読書量、③は本屋や図書館へ連れていってもらった頻度、④父・母に読み聞かせをしてもらった頻度を用いて、検討を行うこととした。

第2点には、家庭環境の影響の変化を横断的に検討するため、子ども側の変数として、被調査者の学年を1学年のみでなく、複数学年取り上げることとする。また、子の読書の変数として読書量という行動面のみを取り上げるのではなく、読書に対する好みや意欲等感情面も別の変数として取り上げる。読書量と読書に対する感情の間には関連性はあるだろう。だが、この2指標を区別することによって、親のどのような役割が子の読書のどの側面にどの程度の影響を与えるかを検討できると考えられるからである。

以上、本研究の目的は、読書固有の家庭環境の役割を整理し、それぞれの役割が子の読書量、読書に対する感情にどの程度の影響を与えるのか、またその影響は年齢と共にどのように変化するのかを明らかにすることである。

方 法

〈調査対象〉 千葉県内の3小学校1中学校。小3:146名(男80,女66),小5:164名(男72,女92),中学2年生:196名(男102,女94)計506名。字がすらすら読め、ほとんどの者が一人で読書ができるようになり、かつ質問紙への回答が可能な学年という基準で、最少学年として小3を選んだ。

〈調査方法〉 学級単位の集団一斉実施の質問紙調査。

〈質問内容〉 大きくは、①子の読書行動に関する項目 ②読書環境としての親の役割を調べるための項目の2部分から成る。質問項目の具体的内容および評定法は Table

1に示した。尚、親の行動に関する回答を、親ではなく子どもに求めたのは、子どもの行動に直接影響を与えるのは、親自身が自分の行動をどのように認識しているかよりも、親の行動に対する子の認識であると考えたからである。

〈分析方法〉 「親の読書に対する感情と子の年齢が子に対する親の行動に影響を与え、さらに親の行動が子の行動や感情に影響を与える」という単方向の因果連鎖を想定した。子の行動や感情が親の行動に影響を与えたり、親の行動が親の感情に影響を与える方向性も考えられる。だが、本論文では親が子に与える影響を論じるのがねらいであり、またパス解析という手法の制約もあり、親の行動から子側の行動や感情への単方向を仮定し分析することとした。具体的には、子の学年と親の好意度(父、母)の2変数を第1水準、親の読書量(父、母)、自宅蔵書量、幼少時の読み聞かせ頻度(父、母)、図書館・本屋へ連れていく頻度の4変数を第2水準、子の感情(好意度、意欲)、子の読書量(月刊読書冊数、1日の読書時間)の2変数を第3水準とし、第1水準から順次、次の水準へと単方向の因果性を仮定し、パス解析を行った。尚、複数項目から構成される変数に関しては、各項目の評定値の合計を変数の評定値として取り扱った。

結 果

1 親の役割内容による影響の違い 各項目、各変数の学年別平均評定値を示したのが、Table 2である。「親の4つの役割行動」を説明する変数として「親の好意度」と「子の学年」の2変数を、「子の感情」と「読書量」を説明する変数として、「親の4つの行動」と「好意度」、「子の学年」を説明変数として用い、パス解析を行った。その結果を図示したのが Fig. 1である。

まず、「親の好意度」から「親の4つの役割行動」への有意な正のパス係数が示された。親が読書好きであることが、子の読書を促す様々な働きかけ行動の程度に影響を与えていることが示された。

次に、「子の感情」へのパス係数をみると、「図書館・本屋」「読み聞かせ」からは有意なパス係数が得られたのに対し、「親の読書量」「蔵書量」からのパス係数は有意ではなかった。ここから、読み聞かせや図書館、本屋に連れていく等、子どもと直接関わることの方が蔵書量や親自身の読書量よりも、子どもの読書に対する感情に影響を与えることが示唆された。

尚、「読み聞かせ」に関しては、父、母の評定値を分けパス係数を算出すると、「母の読み聞かせ」から「子の感情」へは、.18 ($p < .001$)、「父の読み聞かせ」から「子の感情」へは、.04(n.s.)のパス係数が得られ、父よりも母の読み聞かせが影響を与えていることが示された。

一方、「子の読書量」へは、「子の学年」からは負のパ

Table 1 本研究で使用した質問紙の内容と評定方法

I 子供の読書行動に関する質問

① 読書量 a 月間読書冊数 (5段階評定)

1:0冊 2:1-2冊 3:3-5冊 4:6-10冊 5:11冊以上

b 1日の読書時間 (6段階評定)

1:0分 2:30分位 3:1時間位 4:2時間位 5:3時間位 6:3時間より多い

② 感情 a 好意度「あなたは読書が好きですか」に対する5段階評定

5:とても好き - 1:全く好きでない

b 意欲「もしあなたに時間とお金があれば、本を読みたいですか」に対する

5段階評定

5:とても読みたい - 1:全然読みたくない

II 親の行動に関する質問

A 行動

①物理的環境の準備: 自宅の蔵書量

「あなたの本以外に、あなたのおうちにはおよそ何冊ぐらい本がありますか」への6段階評定

1:0-30冊 2:31-50冊 3:51-100冊 4:101-150冊 5:151-200冊 6:200冊より多い

②親自身の読書行動: 読書量

(父、母それぞれについて)「あなたのお父(母)さんは本をよく読んでいると思いますか」

への5段階評定

5:とてもよく読む - 1:全く読まない

③本を読むよう直接動機づける: 図書館や本屋へ連れていく頻度

「あなたのお父さんやお母さんはあなたに、本を勧めたり図書館や本屋へ連れていってくれますか」への5段階評定

5:よく連れていってくれる 4:まあ 3:たまに 2:あまり連れていってこない

1:全然連れていってこない

④子どもに本を読んでやる: 小さい頃の読み聞かせ頻度

(父、母それぞれについて)「あなたが小さい頃、お父(母)さんは一緒に本を読んでくれましたか」への5段階評定

5:毎日読んでくれた 4:ほとんど毎日 3:時々 2:たまに 1:全然読んでくれなかった

B 感情: 好意度

「あなたのお父(母)さんは読書が好きだと思いますか」への5段階評定

5:とても好き - 1:全く好きでない

注1: 下線を付したものが、本研究の変数名である。

Table 2 読書に関する親と子の変数の学年別平均評定値 (SD)

項目\学年	小3	小5	中2
子の読書量 (MAX=11)	6.3(2.0)	5.7(1.5)	5.2(1.9)
月間読書冊数 (MAX=5)	3.7(1.2)	3.2(0.9)	2.6(1.0)
1日の読書時間 (MAX=5)	2.5(1.0)	2.5(1.0)	2.6(1.1)
子の感情 (MAX=10)	7.4(2.3)	7.1(1.8)	6.9(1.9)
好意度 (MAX=5)	3.9(1.2)	3.4(1.0)	3.4(1.1)
意欲 (MAX=5)	3.6(1.4)	3.7(1.1)	3.5(1.2)
蔵書量 (MAX=6)	3.4(1.6)	3.2(1.6)	3.2(1.7)
親の読書量 (MAX=10)	6.3(2.2)	6.2(1.9)	5.3(1.9)
父 (MAX=5)	3.0(1.4)	3.1(1.3)	2.6(1.1)
母 (MAX=5)	3.3(1.3)	3.1(1.1)	2.8(1.1)
図書館・本屋 (MAX=5)	2.9(1.4)	3.1(1.2)	2.9(1.2)
読み聞かせ (MAX=10)	5.9(3.0)	5.8(2.8)	5.2(2.5)
父 (MAX=5)	2.4(1.5)	2.3(1.3)	2.1(1.2)
母 (MAX=5)	3.5(1.2)	3.5(1.1)	3.2(1.6)
親の好意度 (MAX=10)	6.6(2.0)	6.9(1.8)	6.4(1.8)
父 (MAX=5)	3.1(1.4)	3.4(1.2)	3.1(1.1)
母 (MAX=5)	3.5(1.2)	3.5(1.1)	3.1(1.1)

Table 3 親の行動から子の感情, 読書量への学年別重回帰分析結果 (標準偏回帰係数及決定係数)

基準変数	子の感情					
	小3		小5		中2	
説明変数	β	r	β	r	β	r
親の読書量	.05	.15	.07	.21**	.03	.19*
蔵書量	.00	.09	-.15	-.09	.12	.20**
読み聞かせ	.31***	.41***	.29***	.34**	.02	.19**
図書館・本屋	.27***	.38***	.23**	.34**	.29***	.33***
決定係数 (R ²)	.22***		.21***		.13***	

基準変数	子の読書量					
	小3		小5		中2	
説明変数	β	r	β	r	β	r
親の読書量	.08	.27***	.05	.19**	-.09	.09
蔵書量	.18*	.27**	.06	.08	.27**	.31***
読み聞かせ	.25**	.35***	.12	.16*	.09	.15*
図書館・本屋	.09	.24**	.25**	.24**	.18*	.24***
決定係数 (R ²)	.18***		.11**		.13***	

注3: *は p<.05, **は p<.01, ***は p<.001の有意水準を表している。

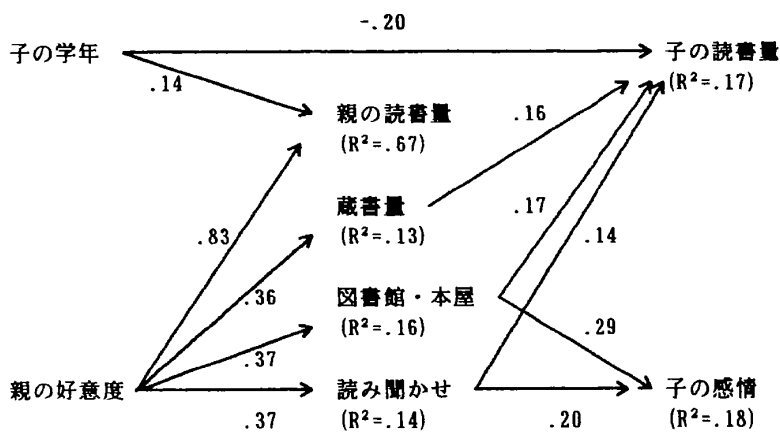


Fig. 1 親の好意度, 行動から子の感情, 読書量へのパスダイアグラム

注2: 矢印上の数値は標準偏回帰係数を, () の数値は決定係数をあらわしている。
p < .05 で有意な値のみ記した。

すが、「図書館・本屋」「読み聞かせ」「蔵書量」からは正のパスが示された。

「蔵書量」は「感情」へのパス係数は有意ではないが、「読書量」には有意な正のパス係数を示している。すなわち家に本があることは、読書量には影響を与えるが、感情へは直接影響を与えていないと推察される。ここから、親の果たす役割行動には、子の感情と行動という異なる面に影響を与える行動があることが示唆された。

2 年齢による親の影響の変化 親の影響の変化を調べるため、親の4種類の行動を説明変数とし、子の感情と読書量への重回帰分析を学年別に行った結果が、Table 3である。

「子の感情」に関して決定係数の値を見ると、高学年ほど小さくなっている。また「読書量」についても、小5、中2の方が小3よりも決定係数が小さい。

そこでさらに各説明変数の標準偏回帰係数をみると、「読み聞かせ」からの係数の値は高学年ほど小さくなっている。同様に、「子の読書量」への値も、「読み聞かせ」からの値は学年と共に小さくなっている。ここから、「読み聞かせ」の影響は子の学年と共に弱くなっていくこと、中学生では、幼少時の読み聞かせの影響はほとんどないことが明らかとなった。

一方、「図書館や本屋」の影響は、小3の「読書量」への影響は有意ではないが、小5、中2では「子の感情」「子の読書量」いずれに対しても係数の値は有意であり、その値にはあまり大きな変化は見られない。したがって、「読み聞かせ」の影響は弱くなっていくが、「図書館・本屋」の影響は中2においてもあることが明らかとなった。ここから役割によって、子の年齢に伴い影響が弱くなる役割もあれば、年齢によらず影響を与える役割もある可能性が示唆された。

考 察

本研究では、近年提示されている発達モデルの1つである、初心者としての子どもが熟達者としての親に参加を促されることによってある領域において熟達化していくというモデルを参考にし、読書の習得と発達における親の役割内容を5つに整理した。そして、①家に本を置くという物理的環境準備者としての役割、②親自身が読書を行い、読書熟達者のモデルを子に示す役割、③子に本を読むよう勧めたり、子のための本を買い与えたり、本屋や図書館へ連れていくなど子どもの読書活動参加への直接的な動機付けを行う役割、④親が子どもに本を読んでやることによって直接読み方を教授したり、子どもが本を理解できるよう援助したりする役割の4内容を取り上げ、親の読書好意度とそれらの役割行動との関連、親の行動と子の読書量、感情との関連を子の学年による変化を考慮して検討した結果、新たに次の4点が明らか

となった。

第1に、親が読書好きであることが、子の読書の自立を促す親の様々な働きかけの量に影響を与えること、第2に親が読み聞かせをしたり図書館や本屋に連れて行くなど、読書に関して子どもと直接関わることの方が蔵書量や親自身の読書行動よりも子の読書感情に与える影響が大きいこと、第3に家に本があるという蔵書量は子の読書量と関連があるが、感情と関連があるのは読み聞かせや図書館や本屋へ子を連れていくといった子との直接的な関わりであり、親の役割内容によって子の感情と関連のある役割と読書量と関連のある役割があること、第4に読み聞かせの影響は学年と共に小さくなっていくのに対し、図書館・本屋に連れていく役割の影響度は変化せず、子の学年に伴い影響が弱くなる役割もあれば、変わらず影響を与える役割もあることである。

読書という文化的行動においては、親が読書をどれだけ重視し、子どもが読書に参加できるようにするため、どのような環境を実際に準備するかが子の読書量や感情に影響を与えることが示された。環境として、物理的な環境だけではなく、むしろ参加の機会を与えるような親からの対人的な働きかけという社会的環境が重要であること、役割により親の影響が弱くなる役割と変わらぬ役割のある可能性が示唆された。

幼少時の読み聞かせに関しては、中学生では感情、読書量いずれに関しても標準偏回帰係数の値は小さく有意ではなかった。これは、中学生になると読書が自立的にできるようになっていることを示唆する結果であると解釈できる一方、幼少時のことは中学生にとってはかなり前のことであるので正確な記憶が得られていないためではないか、読書に限らずこの時期には実際よりも親の行動を過小評価する傾向があるためではないか、横断データであるので、この年代ではまだ全体として読み聞かせが今ほど盛んではなかったというコホート効果のためなどの解釈の可能性も考えることができ、本データだけではこれらの可能性を反駁することはできない。

以上のように役割による違いに関する結果は得られたが、全体として、親の影響を説明する決定係数は高いものとは言えなかった。この理由としては、第1には、子の読書には親の影響よりも、物理的な時間の制約等の要因が強く影響している可能性が考えられる。近年子どもは勉強や習い事、クラブ活動などで忙しくなり、自由に遊べる時間が減っていると言われている。したがって親から影響は受けていても、それが直接行動や意欲に結びついていない可能性が推察される。

第2に、本研究の方法論の問題が考えられる。質問紙法を用いているので、自覚化されている範囲でしか影響を捉えることはできないために、影響が小さかった可能性も考えられる。

データの収集に関しては、本研究では次の4点が今後の課題として検討の余地が残されていると考えられる。

第1に、本研究では親の影響を調べる方法として、子どもに親の行動に関する回答を求めた点である。これは、方法の所でも述べたように、子どもの行動に直接影響を与えるのは、親自身が自分の行動をどのように認識しているかよりも、親の行動に対する子の認識であると考えたからである。したがって、親の行動実態と親の行動に対する子の認識にどれだけの一致、あるいはずれがあるのかは本研究では明らかではない。数多く本を読み好きな子ほど親の行動を肯定的に過大評価したり、反対に嫌いで読まない子は過小評価する可能性も否めない。この点を克服していくためには、親の方にも回答を求めると、また親の行動を尋ねる際には、どの程度行動しているのかを一般論として尋ねるのではなく、「この1カ月に何回図書館に連れていってもらいましたか」「先月1カ月の間におかあさんが読んだ本の名前を挙げて下さい」といったように、より具体的な質問形式にするなどの工夫が必要であったと考えられる。また社会的望ましさへのバイアスを抑えるためには、読書だけではなく、スポーツやテレビに関しても尋ねるなど複数の活動を並行して取り上げ聞いた方がよかったと考えられる。

第2に、子ども側の読書行動に関する質問項目として、読書量と感情に関しては尋ねたが、読書の様式(読む内容や読み方)や、読書技能、読書に対する考え方にっては質問を設けなかった点である。読書量や読書感情への親の働きかけの影響が明らかになった現在、さらに研究を一步進めるためには、どのような働きかけが子の読書のあり方にどのような影響をどの程度与えるのかを、詳細に検討することが必要だろう。

第3に、親の役割行動を5種類に分類し、そのうちの4行動をとりあげ検討したが、各役割行動を測定する質問項目を1項目あるいは父・母別に2項目しか作成しなかった点である。例えば、「本を読むよう直接動機づける」という役割を測定する項目として「図書館・本屋へ連れていく頻度」を取り上げたが、例えば「実際に本を読むよう勧める頻度」や「本を買い与える頻度」などもその役割を測定する項目になり得るだろう。また親や子どもが読んだ本の内容について、親子で会話をすることも、小・中学生の時期には大きな影響を与えることが親子読書会の実践記録(例えば日本子どもの本研究会, 1988 a, b)では報告されているので、こうした項目を含めることもできるだろう。複数の項目によって1つの役割を測定していく「質問の厚み」が必要であったと考えられる。

第4に、子どもの側の属性を表す外生変数として、本研究では「学年」を取り上げた。「読み聞かせの影響は学年と共に弱くなっていく」という際に、「学年」が意味するものが何であるかに関しては、本研究では多様な解釈

が可能である。それは、本研究では子どもの認知的能力や社会的能力、読書経験の長さや読書固有の技能の発達、様々な生活経験や生活様式の変化など多様な内容を含み代表する変数として「学年」を用いたからである。親の影響が弱くなっていくのは、子のどのような能力の発達に応じたものであるのかを明らかにするためには、子側の能力内容として様々な能力を測定した変数を導入し、どの能力が影響しているかをより明確に同定することが必要だと考えられる。

また分析方法に関しては、本研究では一方向の因果連鎖モデルを想定することにより、データの解析を行った。だが、現実には親の行動によって子の行動が一方向的に影響を受けるだけではなく、子の行動によって親の子に対する行動も当然影響を受けるはずである。この点は、実態に即すよう、さらにモデルを洗練させていかねばならないと考えられる。

最後に、理論的な課題として、本研究では文化的な行動として読書を取り上げ、親の果たす役割内容と子の行動の関連を検討したわけだが、本研究で得られた知見が他の文化的な行動においてどの程度支持されるのか、それとも読書行動特有のことであるのかの検討が必要だと考えられる。例えば、読書では物理的な環境よりも、子どもへの直接的な関わりが影響を与えた。これは、読書が高度な認知的技能を要する行動であり、読書を一人で楽しめるような技能を習得するのに時間を要すること、また最終的には友人と共に行うよりも一人で行う行動であるという行動の持つ性質が関与していると考えられる。だが、行動によっては、物理的環境さえ準備されれば子どもが積極的に行動する行動も有り得るだろう。漫画やファミコンなどは物理的環境が整えば子どもはかなり自発的に行うかも知れないが、ピアノやバイオリンなど楽器演奏では親の関わりが必要ではないかと予想される。

また、読書に関しては、中学生になれば親の影響は弱くなっているが、どのような行動でも中学生になれば影響は弱くなるのか、反対にこの時期に影響が強くなったり、新たに影響が出てくる行動もあるのか、もっと早くから親の影響がなくなる行動もあるのかを検討することによって、読書の習得と自立過程の特徴がさらに明らかになるだろう。従来の読書研究の多くは、読書領域の実態にのみ焦点を絞って検討をしてきた。だが、他の様々な行動における親の影響と比較検討してみる事が、読書行動習得に固有の特徴を明らかにする1つの手がかりを与える可能性を有しているのではないかと考えられる。

また本研究は、「熟達化」「認知的徒弟制」の概念を理論枠組みを構成する上で参考にしてきた。本研究では、親は読書の技能を十分に持ちその社会の中での読書に対する価値観を共有している人という意味で熟達者と読んだ。本研究は、参加と熟達化を促す親の関わり方に注目

し検討したものであり、読書の熟達化過程自体を扱った研究ではない。読書の熟達化自体を問題にしていく際には、狭義に読書技能、読解能力の熟達化として捉えるのみではなく、文化的な行動としてより広義に、その社会の中で読書の熟達者というものがどのように捉えられているのか、どのような方向での進歩を熟達化と呼んでいるのかを厳密に検討する必要があるだろう。また家庭での教育を徒弟制概念を用いて考える際にも、職業における徒弟制との違いが何であるのか、構造や関わり方の違いを検討していく必要があると考えられる。

Lave & Wenger (1991) は、職業における徒弟制を対象とし、文化的な技能の習得が職業集団の中でどのように行なわれているのかをエスノグラフィーの方法を用いて明らかにしている。家庭における文化的行動の習得と熟達、およびそこで親がどのような役割を果たしているのかを検討する際にも、日常生活の中での行動に目を向け観察分析していくことが、今後に残された大きな課題だと考えられる。

引用文献

- 秋田喜代美・無藤 隆.(1991). 読書の印象と概念：読書の好きな子嫌いな子の質的検討(1)(2). 日本教育心理学会第33回総会発表論文集, 585-586.
- 東洋・柏木恵子・ヘス, R. D. (1981). 母親の態度・行動と子どもの知的発達：日米比較研究. 東京：東京大学出版会.
- Engelsing, R. (1973). *Analphabetentum und lektüre: Zur socialgeschichte des lesens in Deutschland zwischen feudaler und industrieller Gesellschaft*. 中川勇治(訳).(1985). 文盲と読書の社会史. 東京：思索社.
- 深谷和子.(1978). ママは本好き だからぼくも本好き. カリーフ2号. 東京：ブックローン社
- 深谷昌志.(1983). 勉強好きな子を育てる親. 児童心理, 10, 1794-1804. 東京：金子書房.
- 福武書店教育研究所.(1985). 読書(その2). モノグラフ小学生ナウ 第5巻7号.
- 福武書店教育研究所.(1991). 中学生にとっての読書. モノグラフ中学生の世界第39巻.
- 福沢周亮(編).(1991). 子どもと本の心理学. 東京：大日本図書.
- Hatano Giyoo. (1982). Should parents be teachers too? ; A Japanese View. 独協大学教養諸学研究, 17, 54-72.
- Heath, S. B. (1982). What no bedtime story means: Narrative skills at home and school. *Language in society*, 11, 49-76.
- 亀村五郎.(1984). 子どもの読書. 東京：大月書店国民文庫.
- Kinderman, T., & Skinner, E. A. (1988). Developmental tasks as organizers of children's ecologies : Mothers' contingencies as children learn to walk, eat, and dress. In J. Valsiner, (Ed.) *Child development within culturally structured environments. Vol. 2 : Social co - construction and environmental guidance in development*. New Jersey : Ablex Publishing Corporation. pp. 66-105.
- Lave, J. & Wenger, E. (1991). *Situated learning : Legitimate peripheral participation*. Cambridge : Cambridge University Press.
- 毎日新聞社.(1991). 1991年版読書世論調査. 東京：毎日新聞社.
- 無藤 隆.(1992). 子どもの生活における発達. 東洋・繁多 進・田島信元(編) 発達心理学ハンドブック. 東京：福村出版 pp 1083-1103.
- 滑川道夫.(1979). 映像時代の読書と教育. 東京：国土社.
- 日本こどもの本研究会.(1988a). 中学生の読書教育. 東京：国土社.
- 日本こどもの本研究会.(1988b). 小学校中学年の読書教育. 東京：国土社.
- 二宮克美・梶田正巳・吉田直子・杉村伸一郎.(1992). 入浴行動にみる自立過程と親子の関係, 日本発達心理学会第3回大会論文集 89.
- Price, G. G. & Hatano, G. (1991). Toward a taxonomy of the roles home environments play in the formation of educationally significant individual differences. In S. B. Silvern (Ed.) *Advances in reading / language research. Vol. 5 : literacy through family, community, and school interaction*. London : JAI Press. pp 37-62.
- Rogoff, B. (1990). *Apprenticeship in thinking : Cognitive development in social context*. New York : Oxford University Press.
- 阪本敬彦・岡田 明・高木和子.(1979). 読書興味の研究. 東京：野間教育研究所 紀要第31集.
- 田島信元・臼井 博.(1979). 認知的社会化研究 日本教育心理学会(編) 教育心理学年報 第19巻 125-144.
- 外山紀子・無藤 隆.(1990). 食事場面における幼児と母親の相互交渉. 教育心理学研究, 第38巻 395-404.
- Valsiner, J. (1988). Ontogeny of co - construction of culture with in socially organized environmental settings. In J. Valsiner, (Ed.) *Child development within culturally structured environments. Vol. 2 : Social co - construction and*

environmental guidance in development. New Jersey : Ablex Publishing Corporation. pp. 283 - 297.

謝 辞

本調査の実施にあたり、ご協力いただきました船橋市立高州第二小学校、千倉町立忽戸小学校、同朝夷小学校、同千倉中学校の先生と生徒の皆様に心から感謝いたします。ご助言賜りました東京大学 大村彰道教授、お茶の水女子大学 無藤隆助教授に御礼申し上げます。尚、本研究の実施にあたり、科学研究費重点領域「知識科学」(課題番号 03245107)の援助を一部受けました。

Akita, Kiyomi (University of Tokyo). *The Influence of the Family Environment on Children's Book Reading Activities*. THE JAPANESE JOURNAL OF DEVELOPMENTAL PSYCHOLOGY 1992, Vol. 3, No. 2, 90 - 99.

This paper examined to what extent and when parents influence their children's book - reading activities. The following were assumed to be the four aspects of the family environment which mediate this influence : (1) provider of physical environment (PP), measured by the number of books at home ; (2) model of expert book - reading (ME), parents' own frequency of book - reading ; (3) encouragement of children's reading activities (RE), the taking children to the library, etc. ; and (4) co - participant in reading (CP), frequency of reading books with children, etc. Third, fifth and eighth graders ($N = 506$) answered a questionnaire about their family's influence on their reading. The main results were as follows. (1) The parents performed these roles more frequently the more they personally liked reading. (2) Direct parent - child interactions such as RE and CP scores were positively related to their influence on children's feelings, but PP and ME scores were not so related. (3) PP scores were positively related to the frequency of reading. These latter two results show that some roles relate to children's feelings and some roles relate to the frequency of activities. (4) The influence of parents declined at children's higher age levels.

【 Key Words 】 Reading, Family Environments, Cognitive Apprenticeship, Parent - Child Interaction

1992. 1. 9 受稿, 1992. 11. 27 受理